
烏使い

背黄青

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

烏使い

【Nコード】

N0239V

【作者名】

背黄青

【あらすじ】

小さな森の奥で、烏に育てられ、烏の言葉しか知らずに育ち、烏の群れの長となった少年の短い物語。

ピアプロ・pixiv・ブログでも載せた物に、改行修正などをして転載。

とある所に在る森の中
そこには、鳥からすに育てられた少年がいた。
彼が何故、鳥に育てられたのかは分からない。誰も知らない。
今では彼は、その鳥達を僕しもとし、森を支配しんぱしていた。
鳥の言葉しか使わず、森の奥でひっそりと暮らしているその少年
を、

人は「鳥からす使い」と呼んだ。

ある日のこと、何も知らずに森へ入ったものが居た。
道に迷ってしまったらしい。同じ場所をグルグルと周っていた。

鳥使いはそれに気付き、鳥の言葉で指示する。

「鳥、鳥、侵入者達を、追い払え！」と

それを聞いた鳥達は、真っ先に何も知らぬその“侵入者”に向か
っていった。

つつかれ、蹴られ、逃げ出す人。

鳥使いはそれを見て、安心したように微笑んだ。

戻ってきた鳥達に褒美をやりながら、鳥使いは言った。

「鳥、鳥、ずっとこの森を守っていいこうな！」

人には通じない、鳥の言葉で言いながら笑う。

鳥も少年も、それで満足だった。

この森で、同じ鳥と一緒に、この森を守りながら暮らす。それだ
けで良かった。

そうして数年が経ち、鳥使いは青年になった。

未だに変わらぬ生活。しかし、それは突然崩壊した。

<ドオン!>

鈍い銃声が森に響く。

「鳥、鳥！一体何があった!?!」

鳥使いが音のほうへ走りながら、近くの木に止まっていた鳥に聞く。

「どうやら、仲間の一人が人間に撃たれたらしい」

「え……?」

鳥使いは、さらにスピードを上げ、音のほうへ向かう。

そこには、銃を持ったまま、悔しそうに下を向く人間と、その視線の先に、血に塗れた鳥がいた

「っ!!お前!!何をした!」

鳥使いは銃を持った人間に向かって叫んだ。

しかし、鳥の言葉など、人には分からない。

声に驚いた狩人は、その手に持った銃で青年を撃った。

倒れこむ鳥使いの元へ、沢山の鳥が集まってくる。

狩人は恐ろしくなって逃げ去った。

そしてその晩、逃げ去った狩人と、その仲間達の手で森が焼き払われた。

逃げ惑う森の動物達。鳥達も例外ではない。

「早く、早く逃げないと!!」

他の鳥達に逃げることを促す鳥。そう言って、逃げ去ろうとしたが、

「鳥、鳥……どうか……どうか傍にいておくれ……」

か細い声。聞きなれた主人の命令の声。

鳥達は、燃え盛る森の中で、主人が息絶えるのを見守っていた。

そして、燃え尽きた。

その後、森の焼け跡から見つかったのは、

焼け焦げた真っ黒な鳥の大量の死骸と、

それに埋もれた、青年の笑顔のままの亡骸だった。

(後書き)

くあとがき

いろんなところで載せてるのをここにも出してきてすみませんw
初投稿でこんなもので申し訳ないですorz
正直どこまでが年齢制限引つかかるのかわからなかったのが念の為
残酷描写キーワードを入れましたが・・・どこからどこまでなんで
しょう？

それでもここまで読んでくださった方には感謝します。
ありがとうございます！

ではっ！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0239v/>

烏使い

2011年10月9日12時26分発行